



人が育つ 保育づくり、地域づくり

社会福祉法人鎌倉たんぼぼ会理事長

小林 忍 さん

全障研との出会いは1990年代、「みんなのねがいネット」(全障研のパソコン通信)がはじまりだったと思います。私には子どもが三人いるのですが、三女が一歳半の時にネフローゼ症候群になり入院をくり返していました。私はパソコンおたくで「みんなのねがいネット」に載っていた全国病弱教育研究集会の基調報告に出会いました。その中身が自分の気持ちとぴったり一致したんです。娘が入院していた病棟では、面会にきているお母さんたちから悩みや心配事の話をとくさん聴いていました。基調報告は、入院時の保育体制のことや学校教育を受けさせたい思いなど、母親たちのねがいと重なる解決の道を示していました。

病院には県立養護学校が併設されていますが、病棟にも先生が来ていたのですが、学籍のない病棟の子どもたちの教材は教員の持ち出しになっていたりと問題が多くありました。わが子は学齢期には間がありました。お母さんたちと養護学校の校長に要望を訴えに行きました。たとえ入院していても、子どもにとって教育や保育は必要だと当時から強く思っていました。そんななかで、1992年には全障研大会の病弱教育分科会から独立した全国病弱教育研究会の立ち上げにも参加しました。

子どもの病気をきっかけに保育所の運営に



かかわるようになり35年ほどたちます。私たちの保育園の前身は、公立保育園設置の会です。保育所づくりは、地域のコミュニティの基礎になります。子どもから高齢者までバランス良く暮らせる地域づくりを訴えて、住民とも地道に合意を築きながら運動を展開してきました。保育所づくりは、あらゆる意味で人間づくりにかかわるものだと思います。労働組合のあり方をふくめて、みんなで学びあい「要求で一致する」こと、要求を実現するためにみんなで力を合わせていくこと。障害者運動のなかでいわれる「私たちのことを私たち抜きに決めないで」というスローガンは、保育運動にも共通します。以前は国鉄で労働運動をしていたので、当時の悔しさも含めた経験から今の基本となる考え方がつくられた気がします。地域で、職場で、合意形成のためにはなにを訴えないといけないのか、そんなことにいつも心を砕いてきたのだと思います。そして、実践を記録してみんなで討議すること。発達の勉強におわりはありません。いつの時代も自分たちから学び続けることが、保育づくりの鍵になっていきます。(談)

こばやし し のぶ / 1946年長野県佐久市生まれ。全国民間保育園経営研究懇話会役員、全国病弱教育研究会副会長を歴任。全障研神奈川支部。高校卒業後、国鉄に奉職、夜間大学で学び教職をめざす。職場の差別に憤慨し労働運動に参加。子どもの病気をきっかけに保育所の運営にかかわる。